

共和主義的人間像と孤独な散歩者の形象

——ルソーの場合*——

永見文雄

Faut-il s'étonner si j'aime la solitude? Je ne vois qu'animosité sur les visages des hommes, et la nature me rit toujours. (*Neuvième promenade, OC I-1095*¹⁾)

「私が孤独を愛するからといって驚く必要があるだろうか。人々の顔には憎しみしか見られない。しかるに自然はいつも私に微笑みかける。」
〔第9の散歩〕

本日は私の最終講義にお忙しいなかをお越しいただきありがとうございます。私は学生時代、卒業論文でジュネーヴ出身の思想家・作家ジャン＝ジャック・ルソー（1712-1778）を取り上げて以来、ずっとルソーを研究してきました。ルソーしかやってこなかったと言ってもよいほどですが、そういうわけで、本日もルソーについてお話ししたいと思います。最終講義ですので、たくさんあるルソーの作品のなかでもルソーの最後の作品と言ってよい『孤独な散歩者の夢想』（以下、『夢想』）を中心に、ルソーの孤独について考えてみたいと思います。事実、ルソーと言えば、ひ

* 本稿は2018年1月20日に行われた筆者の最終講義の草稿である。

1) ルソーの著作からの引用はガリマール書店のプレイアド叢書『ルソー全集』（全5巻）*Oeuvres complètes de J.-J. Rousseau*, B. Gagnebin et M. Raymond éd., Paris, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1959-1995, 5 vol. から行い、たとえば第1巻1095頁はOC I-1095のような略号で本文中に示す。

とりぼちで植物採集にいそむ非社交的人間であるというのが、広く流布し、よく知られたイメージかも知れません。そうしたイメージを作り上げるのに貢献した一番の作品こそ、今日取り上げるルソーの「白鳥の歌」『夢想』にほかなりません。しかし、はたしてルソーは本当に孤独を求め、本来的に孤独を愛する人間だったのでしょうか。公共の（共通の）大義 *cause publique* (*commune*) を重視する共和主義の政治哲学者がルソーのもうひとつのよく知られた顔ではなかったのでしょうか。他者との共生に無関心で、自分だけの生活にひきこもりたがる人は、そもそも共和主義的な政治社会の市民（公民）にふさわしいとは言えないでしょう。共通の利益 *intérêt commun* から出発して公共善 *bien publique* を目指す「一般意志」という概念を根底に据えることによって、誰もが公共の事柄（レス・プブリカ）に関心を持つことが共同体の一員としての義務であるような政治体を構想したルソーと、世間の目を避けひとり田園をそぞろ歩くルソーは矛盾しないのでしょうか（ルソーは10歳までは別にして、そもそも共和政社会に生きていたわけではなかったのでは？ と反論されるかもしれません。それも答えのひとつでしょう）。ふたつのルソー像は還元不可能な二面性を表しているのでしょうか。それとも、ふたつのルソー像が矛盾しないとしたら、では、どう折り合いをつけて、同じルソーにおけるこのふたつの異なる傾向を－共和主義的人間と孤独な散歩者というふたつの形象の共存を－説明できるのでしょうか。これが『夢想』におけるルソーの孤独をテーマとする本日の最終講義の、出発点となる問題意識にほかなりません。

初めに執筆と出版について確認しておきましょう。『夢想』はルソーの「白鳥の歌」と呼んでよい作品であるとさきほど述べましたが、執筆は、「第1の散歩」がおそらく1776年8月の終わりか9月の初めに書かれ、そして、ヴァランス夫人との出会いから50年目の「枝の主日」（1778年

4月12日、著者の死の3カ月前)に書き出され死によって中断され未完に終わった「美しく濃密な」(ベルナルディ)「第10の散歩」まで、約1年8カ月間に及んでいます。著者ルソーが64歳から65歳のことです。最初の出版はルソー没後4年の1782年に『告白』の前半部6巻と一緒にジュネーヴで行われました。ルソー最晩年の最後の作品であるということがこの作品を考える上で大切です。

ところで次に、標題の *Réveries du promeneur solitaire* に含まれる3つの単語、すなわちフランス語で後ろから「孤独な」と「散歩者」と「夢想」について考えてみましょう。真ん中の「散歩者」から見てみます。標題が示すとおり、ルソーは当時住んでいたセーヌ右岸のプラトリエール街(現在のパリ1区ジャン=ジャック・ルソー街、レ・アルやサン=トウスタッシュ教会の近くです)から、(以下、配布資料の地図を参照してください)ある時は東へ(「第2の散歩」、シュマン・ヴェールからメニルモンタン、シャロンヌへ)、ある時は南へ(「第6の散歩」、ビエヴル川沿いにジャンティーイ方向へ進み、新しく建設中だった現在のラスパイユ通りからアンフェール門へ)、またある時は北へ(「第9の散歩」、ヌーヴェル・フランスすなわち現在のポワソニエール街からクリニャンクール、モンマルトル方向へ)、あるいは西へ(「第9の散歩」、ポルトマイヨからブーローニュの森を抜けてミュエット、パッシー方向へ、あるいはシャン・ド・マルスやアンヴァリッド周辺へ)と、滅多にないことですが時には妻のテレーズを伴い、しかしたいていはひとりで、出かけています。この作品における散歩者のイメージを正しく掴むには、19世紀中ごろのオスマン男爵による大改造が礎いしづえとなった現代のパリを思い浮かべてはなりません。ルソーの時代のパリは都市としての規模が今よりはるかに小さかったので、ここに挙げた地名のほとんどは市街地を外れた田園地帯(草原や丘や森)にありました(シュマン・ヴェールという名前がその名残です)。そ

して、たとえばエコール・ミリテール周辺に出かけたのは、「第9の散歩」から引用します、「そこで花をいっぱいつけた苔を見つけるつもり」だったからだと著者は述べています（「第9の散歩」OC I-1086）。要するに、標題にある「散歩者」ルソーが行っている散歩とは、パリの街の雑踏を抜けて緑したたる田園地帯を気の向くままに巡り歩きながら、「第2の散歩」から引用します、「のどかな景色を横切り……緑のなかで植物をじっと見つめる」（「第2の散歩」OC I-1003）ことであり、また、「第7の散歩から」引用します、「色鮮やかな花々、七宝のような野原、涼しげな緑陰、小川、茂み、草原」を眺めることによって腐りかけた想像力を清めること（「第7の散歩」、OC I-1068）でした。それも1時間や2時間ではありません。少なくとも半日はかけて何キロも歩き回るのが普通だったようです。パリ周辺の散策だけでなく、以前滞在したスイスのビエンヌ湖にあったサン＝ピエール島での6週間の生活——ジュネーヴ湖の岸辺にくらべて「もっと野性的でロマンティック」（OC I-1041）と形容していますが、フランス語でのロマンティックという言葉の最初期の使用例です——（「第5の散歩」）、ゲルノーブル近郊イゼール川の畔での植物採集やスイスの山登り（「第7の散歩」）の回想もあります。そういう場合も、パリから郊外への場合と同じく、散策の途中で遭遇した思いがけない出来事をルソーは語りたいのです。『夢想』を読む楽しみのひとつはルソーが物語るこうした多彩なエピソードにあります。

今度は、フランス語標題の最後に付けられた「孤独な *solitaire*」という形容詞について考えてみましょう。第一にこれは「ひとりで行う、ひとりで味わう」の意味で使われており、「連れだって行う」の反対の、「同伴者のいない、単独の」の意味です。*Promeneur solitaire* は日本語で従来「孤独な散歩者」と訳されていますが、要するに「ひとりきりで散策する人」の意です。第二に、この場合の「孤独な」には、「ひとりきりで寂し

い、悲しい」というようなネガティブなイメージはないことに注意しましょう。むしろ「ひとりで満足している」という含意がそこにはありそうです。「人づきあいから来る煩わしさがなくていい、ひとりでいて清々している」というような意味が込められている場合が多いように感じられます。先回りしてもっとはっきり言えば、ルソーの場合の「孤独」には、他者の悪意ある視線から逃れていられるのでほっとしている、というニュアンスが含まれるのです。これは、なぜルソーが最晩年の日々を「孤独な散歩」と「夢想」に耽って過ごすのか、その理由に関わる事柄ですから、本稿のテーマにも関連することです。第三に、時には絶対的な孤独、自由と幸福の概念と三位一体的に結びついた孤独、「第5の散歩」から引用します、「神のように自己充足している *on se suffit à soi-même comme Dieu*」(OC I-1047) と表現される状態の指標となるような極限的な孤独について語られる場合もあります(「第5の散歩」)。これはユダヤ=キリスト教に親しい、人間の非充足性 *l'insuffisance de l'homme* という考え方と対になった神の自己充足 *l'auto-suffisance de Dieu* という概念に含まれる孤独のことで、きわめて特異で特権的な状態とすることができます²⁾。なお、妻のテレーズがいてもルソーが「孤独」という言葉を使うのに支障はきたさなかったらしいことにも注意しておきましょう。何しろ『夢想』「第1の散歩」冒頭の書き出しは、引用します、「とうとうこの地上でひとりきりになってしまった。もう自分以外に兄弟も、近親者も、友人も、世間との付き合いもない。」(OC I-995) というものですが、実はルソーには30代中ごろに知り合い、30年間どこに行くにもほとんど常に一緒だった——亡命中もスイス、イギリス、フランス各地を一緒に転々とした——テレーズというれっきとした同伴者がいて、『夢想』執筆当時も、1770年

2) 拙著『ジャン=ジャック・ルソー 自己充足の哲学』(勁草書房、2012年) 第3部第4章「キー概念としての自己充足」435頁以下を参照。

以来プラトリエール街に借りていた質素なアパルトマンにふたりで慎ましく暮らしていたのです（正式に結婚したのは知り合って20年以上経った1768年8月のこと）。ルソーにとってテレーズとはいかなる存在だったのでしょうか。しかしこれはまた別の問題です。

では標題に含まれる第3の言葉、フランス語タイトルの冒頭に置かれた「夢想 les rêveries」についてはどうでしょうか。この言葉は動詞 rêver（夢を見る）に由来し、文脈によっては「ばかげた考え、夢物語、妄想」などのネガティブな意味となる場合もありますが、一般には「物思いに耽っている」の「物思い」の語感に相当します。しかしルソーによれば、ここではもう少し独特の意味が与えられています。すなわち、ルソーが夢想に至ったのは、思考すること（考えること）を避けた結果だと言うのです。ものごとを思考すれば（考えれば）どうしても自分の置かれた惨めな状況、さまざまな不幸に思い至らざるを得ません。それを避けた結果がここで言う「夢想」であり、「瞑想 la méditation」なのです。「第7の散歩」から引用します、「夢想は私の疲れを癒し、私を楽しませる。熟考 la réflexion は私を疲れさせ、悲しませる。思考すること penser は私にとってはいつでもつらい仕事であり、魅力のないものだった。……心ならずも自分の不幸を考えてしまう penser のを恐れて、考えること penser を慎まざるを得なかった……」（「第7の散歩」、OCI-1061～1062, 1066）

こうして見てくると、作品の標題に含まれる3つの言葉、「孤独な」と「散歩者」と「夢想」は互いに密接に関連し、響き合っているようです。世間の目を逃れてひとりになる（孤独）、パリの喧騒を逃れて田園を巡り歩く（散歩者）、不幸な境遇を思い出させる思考を逃れて取りとめのない夢想に耽る（夢想）……、3つの言葉はいずれも、何かから〈逃れる〉、何かを〈避ける〉行為であり、あるいはその結果を表しているのです。ルソーは何から逃れ、何を避けようとしたのでしょうか、またなぜそのよう

に逃れ、避ける必要があったのでしょうか。

この問題を考えるには『夢想』が書かれるまでのルソーの実生活を少し振り返ってみる必要があります。そして特に『夢想』に先立ついわゆる自伝的な作品群を構成する『告白』ならびに『対話——ルソー、ジャン＝ジャックを裁く』（以下、『対話』）と『夢想』との関連（類似点と相違点）に目を止める必要があります。結論から言えば、ルソーが30代になってからの生を眺めて見ますと、ルソーも最初から孤独を求めたわけではなく、それどころか若い頃は人並みに社交生活を楽しみ、立身出世を追求した人でもあった、ということがわかります。また最晩年の3作品については、『夢想』が先行2作品（『告白』と『対話』）の執筆意図の挫折の上に成り立つ作品であるということが肝心です。以上2点について、以下に要点を押さえておきましょう。

1742年にヴァランス夫人の元を最終的に去ってサヴォワ公国のシャンベリーからパリに上った時のルソーの野心は、音楽家として身を立てることでした。その後一時外交官を夢見てヴェネツィアで過ごしたこともありましたが、音楽家の夢が消えたわけではありませんでした。ヴェネツィアからパリに戻ったルソーは、オペラの作曲にいそしみながらラモーの作品の手直しの下請けをするなどしつつも、それだけではとうてい食べて行けませんから、現実には当時の社交界の華であったデュパン夫人とその義理の息子のフランクイユ氏という、総括徴税請負人の世界に依存して生きる道を選びました。デュパン夫人には作家になる野心があり、その秘書を勤めるルソーは何百という著作の要約を夫人のために何千頁も作成していたらしく（「デュパン文書 *papiers Dupin*」と呼ばれますが残念なことにすべて散逸しました）、この経験が後の思想家ルソーの知的準備にたいへん役だったと言われています。また夫人の秘書とは別にフランクイユ家の会計係としても生計を立てていましたが、ルソーと同世代のフランクイユ氏

も科学アカデミー入りを狙うほどの知識欲に溢れた人物で、ルソーはこのフランクイユと一緒に化学を勉強して『化学概論』と題された草稿まで残しているほどです。この作品は結局草稿の状態に留まったのですが、ルソーにおける主要概念の形成に重要な役割を果たしたと評されています(ベルナルディ)。こうして、『学問芸術論』(1750年末刊行)の爆発的成功で思想界にデビューした後、1752年秋にはオペラ「村の占い師」の大ヒットでかなりの収入を得てデュパン家ならびにフランクイユ家と少なくとも経済的には縁を切り、写譜で生計を立てる決心をし、のみならず物質的・精神的「自己改革」を志すことになるまでの10年ほどの間、ルソーはパリの大ブルジョワ富裕層に依存する存在でした。当時の平民出身の才能ある若者にとって、有力な婦人のサロンを足がかりにして立身出世をはかるルソーのような生き方は、けっして例外ではありません。

他方ルソーはおそらく1742年中に知り合い無二の親友となるディドロのおかげで、後に百科全書派と呼ばれることになる人たちとも交友関係を結びました。グリム、ダランベール、ドルバックといった同世代の人たちです。『夢想』のなかで「私の敵たち」としばしば呼ばれているのは、神学者やオラトリオ会士や医者たちを別にすればほとんど常にここに名前を挙げた人たちを暗に指しています。単に気の合う仲間たちというだけでなく、思想的にもルソーは百科全書派の一員でした。事実400以上の音楽項目を『百科全書』に寄稿してもいます。あるいはまた、『百科全書』第5巻に書いた「エコノミー(モラル・エ・ポリティック)」の項目(「社会と国家の管理運営」という意味ですが、1758年に『国家運営論』として単独に出版されました)から『社会契約論』の最初期の草稿である「ジュネーヴ草稿」(副題は「共和国の形態について」)第1編第2章執筆に至る期間(1755年夏から56年春)に、ルソーによる「一般意志」概念創出のコペルニクス的転換にディドロの執筆した「自然法」の項目が果たし

た重要な役割も、よく知られています（ベルナルディ参照³⁾）。当時のルソーは啓蒙のフィロゾフ達のいわば知的同盟者だったのです。しかしこうした繋がりも、1756年4月9日の、デビネー夫人が提供したパリの北郊モンモランシーのエルミタージュへの転居を転機に断たれることになりました。ルソーが「ドルバックの一派」と呼ぶディドロら百科全書派の哲学者たちと袂を分かった理由はいくつかあって、複合的ですが、パリを去ってモンモランシーに転居したこと、ディドロの劇作『私生児』（1757年2月刊行）におけるルソーへの揶揄（「ひとりでいるのは悪人だけ」）、ドゥードト夫人への恋（1757年春以降）に由来するデビネー夫人やグリムらとの軋轢に加えて、ダランベールが『百科全書』第7巻に寄せた「ジュネーヴ」の項目（1757年10月）が大きな引き金となりました。祖国ジュネーヴでの劇場建設の提案を知って背後にヴォルテールの影を察知したルソーは1757年から58年の冬にかけてダランベールへの反論を書き（『スペクタクルに関するダランベールへの手紙』）、そのなかでディドロとの決別をそれとわかる形で表明します。こうした反目の背後にはディドロらの無神論的な傾向に対する深刻な思想的批判が存在しました。自然宗教を標榜する有神論者ルソーは敬虔な信仰心を持っていた人でした。

このような抜き差しならない状況は1762年1月に書かれた4通の『マルゼルブへの手紙』以来、いわゆる自伝的作品の随所に反映されています。「第2の手紙」から引用してみましょう。「こんな風に私自身にも他人にも不満を感じながら人生の40年を過ごした後で、私は、私をあの社会〔ディドロらとの交友関係を中心とするパリの社交界〕……に縛り付けていた絆を断ち切ろうと空しい努力をしていたのです。」（同第2の手紙、

3) ブリュノ・ベルナルディ『ジャン＝ジャック・ルソーの政治哲学 一般意志・人民主権・共和国』（永見他訳、勁草書房、2014年）、第2章『『エコノミー・ポリティック論』における〈一般意志〉概念の形成』参照。

OC I-1135)「第3の手紙」では、「私は1756年4月9日にやっと生き始めたのです」とも語っています(同第3の手紙、OC I-1138)。続く『告白』の第2部でも百科全書派との人間関係と思想的確執が克明に描かれており、また『夢想』「第3の散歩」は(事情を知らない読者には何のことを言っているのかわかりにくい書き方なのですが)、その全体がこうした百科全書派との思想的格闘そのものを主題としていると言って差し支えありません。自己改革の結果、苦しい探究と熟慮の末に新たな人生の指針を得ましたが、ルソーによればそれは『エミール』のなかの「サヴォワの助任司祭の信仰告白」に結実したとされています(OC I-1018)。しかしながらこうしたルソーは百科全書派から見れば、自分たち啓蒙のフィロゾフの陣営からの卑劣な「脱走者」「裏切り者」と写るのも当然でした。現代の研究者たちがルソーを「啓蒙の内部の敵」(アルテュッセル)、「啓蒙の異端者」(ベルナルディ)、あるいは「啓蒙の自己批判」(マーク・ハリアンゲ)などと呼ぶのも、もったもなことです。

以上の事情を踏まえてみれば、いわゆる自伝3部作に「敵たち」「彼ら」が常に付きまとっているのに理由がないわけではないことがわかります。ルソーの「子捨て事件」を世間に暴露したヴォルテールの「市民の見解」が執筆のきっかけのひとつとなったとされる『告白』は、前半部で「青春の甘美な追想」(OC I-277)に耽ったのとは鮮やかな対照をなすように、その後半部ではディドロらとの重苦しい確執を執拗に描いて自己弁明、無罪証明を試みています。さらに、「ルソー」と「フランス人」が「ジャン=ジャック」の人柄と作品を巡って対話を交わし、「陰謀」の存在を立証するという奇妙な形式の作品『対話——ルソー、ジャン=ジャックを裁く』も、ルソーを取り巻く敵たちの「陰謀と迫害」の妄想に色濃く染まった作品と言えるでしょう。この先行2作品はディドロらフィロゾフたちと有力大臣ショワズールら「迫害者たち」の「陰謀」によって世間に流布

された「悪人ルソー」のイメージを払しょくしたいという強い意志によって成立したものでした。では、『夢想』はどうでしょうか。この作品にも敵、迫害者たち、陰謀、畏、憎悪、憎しみといった一連のネガティブな単語が頻繁に現われるのは事実です。春のうららかな青空が突然顔を見せるといった晴朗な雰囲気を感じ取れるのは「第5の散歩」と「第7の散歩」の一部、「第9の散歩」の一部、それに「第10の散歩」くらいのもので、あとはおおむね重苦しい曇り空に覆われています。これら一連の言葉は『夢想』の世界を支配するキーワードと言ってもよいくらいです。その意味では、最後の『夢想』も先行する2作品の「陰謀と迫害」の世界を引き継いでいると言ってよいかもしれません。しかしながら決定的に異なる点が少なくともひとつあります。それは何でしょうか。『夢想』が先行2作品とは異なり、自己弁明、無罪証明の意志を放棄しているということ、言い換えれば、ヤニック・セイテも指摘するように、作品の受け手、すなわち想定する読者が不在で、ただ自己の楽しみのためにのみ執筆された作品だ、ということです⁴⁾。どうしてそういうことになったのでしょうか。

先行2作品が明確に読者を想定しているのは疑いありません。それは同時代の人たちであり、同時に来るべき世代の人たち、後世の人たちでもあります。執筆の意図も前述のとおり明らかです。デイドロらフィロゾフたちを中心とした広範な「陰謀」の網の目に取り巻かれた自分は不可解な「迫害」の犠牲者となってきたが、自分には何の落ち度も罪もないという、自己弁明、無罪証明、自己正当化です。それを同時代の人たち、なかんずく後世の人たちに訴えるのが最も大きな執筆意図であったと言ってよいでしょう。ではそうした意図は達成されたのでしょうか。ルソーは『告白』完成後パリのサロンのいくつかで公開朗読会を開催しましたが

4) 2016年11月1日の中央大学人文科学研究soでの講演「『夢想』でルソーは誰に語っているのか?」。

(1770年12月から71年5月)、危険を察知したデビネー夫人とディドロが警視総監サルティースに手を回して朗読会は途中で中止を余儀なくされました。浄書された3種類の自筆の完成原稿はいずれも生前出版されることはありませんでした。1776年2月24日土曜日、直接神に捧げる目的でノートルダム大聖堂の主祭壇に供えようとした『対話』の完成原稿についても、内陣の鉄柵が閉ざされており主祭壇に近づくことさえできませんでした。神にまで見放されたと絶望したルソーはその日一日パリ市内を興奮して駆けずり回ったと自ら述懐しています（「先の著作の顛末」OC I-979～980）。後日哲学者コンディヤックに託したものの、コンディヤックも原稿を収めた封筒の表に「1800年になるまで開けるのを禁ずる」と表書きして封印してしまいました。結局出版はこれも死後のことです。すなわち先行2作品の執筆意図は少なくともルソーの生前には達成されなかったのです。

それなら『夢想』はどうでしょうか。いったい『夢想』は何のために書かれたのでしょうか。「第1の散歩」の冒頭の、前に引用した言葉に続いてルソーは自分の状況をこう述べています。引用します、「人間のなかで最も社交的で最も人を愛する心を持った人間が、満場一致で追放されてしまったのだ。」(OC I-995) ここには『夢想』執筆の意図が明快に示されてはいないでしょうか。誰よりも人付き合いのよい人間が、にもかかわらずなぜ世間から、一切から、切り離されてしまったのか。このどうにも受け入れがたい理不尽きわまる謎を、逆説を、背理を、日々自己を見つめ直すことによって解き明かそう、というのです。そういう意味では自己探求としての『告白』の続編と言えないこともありません。それは著者も自覚しています。ですが決定的に違うのは、後世に対する希望を放棄したという点です。『対話』を書いたころのルソーは将来に希望を抱き、何としても著作を後世に残そうと手を尽くしていました。しかし今ではもうそんな

願望は消え失せたのです。「第1の散歩」から引用します、「最初の『告白』と『対話』を書いていた当時は、迫害者たちの貪欲な手からそれを守ってできることなら後世の人々に伝えようと、たえずその方策に心を配っていたものだった。今度の著作〔『夢想』〕についてはもう同じ不安に悩まされることはない。そんな不安を抱いても仕方ないことはわかっているし、人々にもっとよく理解してもらいたいという願望はもう私の心のなかで消え果ててしまった……」（「第1の散歩」OC I-998, 1001）これを要するに、『夢想』は先行2作品の執筆意図の挫折の上に成り立つ作品なのです。後世に、神に向かって、大それた自己弁明をするというような、気負った、肩肘張った、悲壮なところは、『夢想』にはもう見られません。確かにそうした影を引きずってはいますが、もう少し落ち着いて、穏やかな、運命を甘受するといった雰囲気を漂わせた作品です。敵、迫害者たち、陰謀、畏、憎悪、憎しみといった言葉が『夢想』のキータームであると前に述べましたが、それらネガティブな言葉と対を成すように、心の平穩、安寧、平安、安息などと訳される言葉（la tranquillité, le calme, la paix, le repos）もしばしば繰り返され、しきりに強調されています。自己弁明、自己正当化の空しい試みから解放された晴れやかな境地を指しているのです。現世の望みも後世に対する自己弁明もあきらめ、一切を運命として受け入れた人間が、なおかつ残された短い余生を心安らかに、幸せに過ごすための方策、それが孤独に散歩して夢想に耽ることなのです。それは強いられた孤独であり、同時に自ら選択した孤独でもあります。そして孤独になって初めて、自分は孤独に向いた人間であることがわかった、というのがガルソーの実感でもあったのでしょうか。「第6の散歩」から引用します、「これらすべての省察から引き出せる結論はと言えば、自分はけっして本当に政治社会にふさわしい人間ではなかったということだ。」（「第6の散歩」、OC I-1059）そして事実、自分には「孤独へのあの

強い好み」があったともたびたび強調しているのです（たとえば『告白』第1巻 OC I-41, 「第3の散歩」 OC I-1015）。

ここで最初の問いに戻ることにしましょう。ルソーがひとりでパリ郊外を散歩して夢想到に耽る時、何から逃れ、何を避けようとしたのか、またなぜそのように逃れ、避ける必要があったのか。もうあらためて説明するまでもなく、『告白』や『対話』で空しく自己弁明に努めざるを得ないところまでルソーを追いつめたあの迫害者たち（「私の敵たち」）の攻撃や憎悪、憎しみ、軽蔑、侮蔑を避けるためであり、彼らの存在それ自体を忘れるためであり、さらには彼らのせいでルソーを誤解した世間の人たちの悪意に満ちたまなざしを避けるためだったのです。「第9の散歩」から引用します、「私が孤独を愛するからといって驚く必要があるだろうか。人々の顔には憎しみしか見られない。しかるに自然はいつも私に微笑みかける。」（「第9の散歩」、OC I-1095）それは同時にまた彼らに対してルソー自身が意に反して憎悪や復讐心を抱くのを避けるためでもありました。「第6の散歩」から引用します、「要するに私は自分を愛しすぎているので、誰であれ相手を憎むことはできない。そんなことをするのは、自分の実存を狭め、小さくすることだろう。私はむしろそれを宇宙全体に向かって広げたいのだ。彼らを憎むくらいなら彼らから逃げた方がいい。」（「第6の散歩」 OC I-1056）「第7の散歩」ではこう言っています。「そこで彼らを憎まずに済ますために、どうしても彼らを避けなければならなかった。そこで私は万物の母〔自然〕の元に逃れ、その腕に抱かれて、彼女〔自然〕の子供たちの攻撃を免れようとした。私は孤独になった。あるいは彼らの言うように、非社会的で人間嫌いになった。裏切りや憎しみだけで自らを養っている悪意ある人たちの集まりよりは、この上なく非社会的な孤独の方がまだ好ましく思えたからである。」（「第7の散歩」、OC I-1066）

こうして取り戻した落ち着きと心の平穩は、散歩のさなか、ルソーに何をもたらしたでしょうか。それはたとえばある日曜日の、ラ・ミュエット近辺での修道女に連れられた20人ばかりの少女たちとの草上の交歓でした。少し長くなりますが、印象深いエピソードですからここに引用してみましょう。「第9の散歩」からです。「ある日曜日のこと、私たち、妻と私は、マイヨ門に昼食を取りに出かけた。食事の後、ブーローニュの森を抜けてラ・ミュエットまで行き、そこで木陰の草の上に腰を下ろし、日が沈むのを待って、その後パッシィを通してゆっくりと家路につくつもりだった。そこへ20人ばかりの少女たちが、修道女らしき人に連れられてやってきた。私たちのすぐ近くに座る子もいれば、ふざけたわむれている子もいた。みんなで遊んでいるところに、菓子売りが太鼓と福引用の回転式抽選機を持って客待ち顔に通りがかった。少女たちが菓子をたまらなくほしそうなのは様子でわかった。なかの2-3人がどうやら何リヤールか小銭を持っているらしく、抽選機を回させてほしいと先生に頼みに行った。先生がためらって、ああだこうだと言いつつあっている間に、私は菓子売りを呼んで、こう言い付けた。このお嬢さん方みんなに、ひとりずつ順番にやらせてあげなさい。金はみんな私が払うから、と。この言葉を聞いて、少女たちの一行全員にぱっと喜びが広がった。それだけでも、たとえ財布をすっかりはたいたとしても、それ以上に報われたと思えたほどだった。」（「第9の散歩」OC I-1090～1091）その後も、混乱が起これば収拾し、できるだけよい当たりくじが出るように菓子屋にこっそり耳打ちしたり、先生にも勧めてくじを引いてもらったりと、大活躍です。結論部分を引用します。「とうとう私たちは互いにとても満足して別れた。そしてこの日の午後のごとは、私の生涯のうちで最も満足のゆく気持ちで思い出す午後のひと時となった。……またこの小さな一行に会えるかもしれないと思いながら、その後何度も同じ場所に同じ時刻に行ってみたが、もうそ

んなことは起こらなかった。」(OC I-1091 ~ 1092)

こうした草上で交歓を描きながら、ルソーの脳裏にはかなり昔にあった、似たような楽しい思い出もよみがえって来ます。それはラ・シュヴェレットの館の主の守護聖人の祝日の祝宴に招かれた日に、上流階級の人たちと別れて縁日でリンゴ売りの少女と5-6人のサヴォワの少年たちと出会った心温まる思い出です。これもやや長くなりますが、引用してみましょう。同じく「第9の散歩」です。「……私はひとりで縁日をぶらつきてみることにした。いろんなものがあって、長いこと楽しめた。なかでも私の眼を惹いたのは、5-6人のサヴォワの少年がひとりの女の子を取り巻いている姿だった。その女の子は、胸につるした籠のなかにまだ1ダースほどの貧弱なリンゴを入れていて、何とか始末してしまいたい様子だった。サヴォワの少年たちの方でも始末してやりたいのは山々らしかったが、何しろみんなの持ち金を合わせても2-3リヤールしかなく、それだけではリンゴの山を大きく切り崩すわけにはゆかない。……とうとう私は女の子にリンゴの代金を支払ってやり、リンゴを女の子の手で少年たちに配らせて大団円としてやった。その時私は、おおよそ人の心を楽ませる光景のなかでも最も甘美な光景のひとつに接した。その年ごろの無邪気さと相まった喜びが私の周りに広がっていくのが眼に見える、そんな光景だった。というのも、周りで見ていた人たちまでが、子供たちの喜ぶのを見て一緒に喜んだからである。そして私はというと、こんなに安くこの喜びを共にすることができた上に、それが自分の生み出したものだと感じる喜びまで味わったのだった。」(OC I-1092 ~ 1093) ご覧のとおりです。ささやかな善行を施して相手が喜ぶ顔を見て心からの歓びに浸るルソーの、その相好を崩した顔が眼に浮かぶようなこれらのエピソードは、「陰謀と迫害」妄想からついに解放されたルソー最晩年の幸福を喚起して、読者の胸を打たずにはおかないでしょう。

さて、最後に本日の最終講義の出発点となった問題——ルソーにおける共和主義的人間像とその対極に位置する孤独な散歩者という形象の共存の問題——に戻ることにしましょう。はたしてふたつの形象の共存は、ルソー思想の還元不可能な二面性を表すものなのかどうか、という問題です。ヴェネツィア滞在時に芽生えた『国家学概論』の構想以来、ルソーは『社会契約論』に結実する政治哲学者としての仕事に打ち込む過程で、そして『社会契約論』出版後も、さまざまに共和主義的人間像（とその対極の人間像）を描いてきました。それを紹介しながら、それらが孤独な散歩者の形象とどういう関係を取り結ぶのか、考えてみましょう。

しかしその前に、共和主義的人間像を検討するには、その元となっているルソーの政治哲学を素描しておく必要があります。ルソーの政治哲学で最も重要な問題は何でしょうか。レジティムな（正当な）政治体（政治社会）とは何か、またそうした政治体（政治社会）はいかにして設立可能か、ということでした。この問題を解決しようとしたのが、『社会契約論』という著作です。そしてその際に創り出された最も重要な概念が一般意志 *la volonté générale* という概念でした。政治社会の構成員の間に共通の利益 *l'intérêt commun* が存在しなければ、一般意志は成立しません。逆に一般意志がすべての構成員間の共通利益の存在を前提とするなら、一般意志は当然、共通善 *le bien commun* を目指すはずで、共通善という言葉以外にルソーは公共善 *le bien public*、あるいは公共の至福 *la félicité publique* という言葉も用いていますが、いずれも同一の概念の別の表現で、要するに簡単に言えば「全員が幸せになること」を意味しています。このように、一般意志を定義する際に、共通利益や共通善、公共善などの概念が用いられることに注意しておきましょう。ところでルソーの一般意志概念は、デイドロが提起した思想、すなわち「人類の一般社会」が持っている意志イコール一般意志、という思想を逆転して創出されたもので

す。これによってルソーは政治体における主権概念を一新することができました。君主の意志イコール主権という従来の考え方を転倒し、契約（結社契約）によって成立する政治体の構成員全員の意志であるような一般意志イコール主権、としたのがルソーです。一般意志の行使が主権であり、一般意志の表明されたもの（記録、記録簿）が法律ということになります。したがってルソーの構想するレジティムな政治社会においては、法律に従うことは自らの意志に従うことに他なりませんし、それこそ自由であることそのものなのです。こういうわけで、ルソーにとってレジティムな（正当な）政治体とは、国民全員が主権者として立法に参加し、そうしてできた主権者の意志としての法によって統治される政治社会、すなわち共和国こそ、もっともレジティムな政治体、ということになります。そうなりますと、今問題となっている共和主義的人間は、共通善、あるいは公共の至福を、何を措いても第一に考える人間、ということになるでしょう。全員の幸せのなかに自らの幸せを見出す人間、公共の至福こそ各人の幸福の源であると考えた人間、ということです。この点を確認した上で、以下にルソーにおける共和主義的人間像を見てみることにしましょう。

ブレイズ・バコフエンによればルソーには2種類の人間類型が存在するといいます⁵⁾。ひとつは相対的（关系的）人間で、これが共和国の市民（公民）*citoyen*です。もうひとつは絶対的人間で、市民の対極に位置します。ルソーがこの絶対的人間として考えているのは、純粋な自然状態の人間 *l'homme dans le pur état de nature*（『人間不平等起源論』第1部）とブルジョワ *bourgeois*です。『エミール』第1編冒頭でルソーは相対立する

5) Blaise Bachofen, *Rousseau, une anthropologie du « moi relatif »* 参照。この論考は2012年5月にパリのシンポジウムで発表された原稿で、筆者が個人的に譲り受けて初めて読んだが、次の本に収録されている。 *Penser l'homme Treize études sur Jean-Jacques Rousseau*, Paris, Classiques Garnier, 2013. 以下の引用もバコフエンに示唆を得ている。

ふたつの人間類型をこう説明しています。「自然人 *l'homme naturel* は自分にとってすべてである。彼は単位となる数であり、絶対的な整数であって、自分に対して、あるいは自分と同等のものに対して関係を持つだけである。社会人 *l'homme civil* は分母の上に乗っている分子にすぎない。その価値は政治体という全体との関係のなかにある。よい社会制度とは、人間を最もよく脱自然化し、その絶対的実存を奪い去って相対的実存を与え、「自我」を共通の統一体のなかに移し変えることができるような制度である。各個人に、もはや自分をひとりの個人とは考えず、その統一体の一部と考え、もはや全体のなかでしか感じないようにさせる。ローマの市民はカイウスでもルキウスでもなかった。一個のローマ人だった。……」(OC IV-249) ここで自然人について言われていることは、ブルジョワにも当てはまります。公共善、共通善に無関心で、自分の利害にだけは敏感な人間がブルジョワです。共和主義的な人間としての市民の対極にあるこうしたブルジョワ（自己中心的で、公共の至福に興味を持たない存在）について、ルソーのテキストからいくつか引用してみましょう。『社会契約論』第1編第6章の原註（シテ *Cité* という用語に付けられた註）で、ルソーは市民とブルジョワの混同についてこう指摘します。「この言葉〔シテ〕の真の意味は現代の間ではほとんど完全に消し去られている。大部分の人は都市をシテと、またブルジョワを市民と、勘違いしている。」(OC III-361) 『エミール』第1編の冒頭近くでも、ブルジョワを次のように批判します。「社会秩序において自然の感情の優位性を保ち続けようとする人は、自分が何を望んでいるのかわからない。たえず自分自身と矛盾し、自分の気持ちと義務の間をたえず漂い、人間にも市民にもけっしてなれないだろう。自分にとっても他の人にとってもけっして役には立てないだろう。それは現代のあの人たちのひとりだろう。フランス人、イギリス人、ブルジョワだ。そんなものは何ものでもないだろう。」(OC IV-

249～250)『ポーランド統治論』第2章では、ヨーロッパの大都会の住民について次のように述べます。フランス人やイギリス人やロシア人は古代のローマ人やギリシア人と何の共通性もない。「……すべての人の心のなかに利己主義と共に住みついてしまったつまらぬ利益に対する情熱」のせいです(OC III-956)。同じく第3章でも、ブルジョワ批判の舌鋒は衰えを見せません。「今日では、人が何と言おうが、フランス人もドイツ人もスペイン人も、イギリス人さえも、いない。いるのはヨーロッパ人だけだ。誰もが同じ趣味、同じ情熱、同じ習俗を持っている。なぜなら、誰もある特別な制度によって民族としての形態を受け取ったわけではないからだ。同じ状況にある人はみな、同じことをするだろう。すべての人が自分は無私無欲だと言いながら、みなペテン師になるだろう。誰もが公共善を口にしながら、自分のことしか考えないだろう。」(OC III-960)『社会契約論』第1編第7章では、公共善のために果たすべき任務を無償の寄付(見返りのない寄付)と考え、その寄付の額よりも、その義務を果たさないうで他人が被る被害の方が小さいと考える人、国民としての義務を果たさず、市民としての権利だけを享受しようとする人として、ブルジョアを描いています(OC III-363)。『社会契約論』の「ジュネーヴ草稿」第1編第2章「人類の一般社会について」でルソーが「独立した人間 l'homme indépendant」と名付ける人間も、典型的なブルジョアです。賢者と「独立した人間」との対話部分で、「独立した人間」はたとえばこう述べます。「私が不幸になるか、さもなければ他の人たちが不幸になるか、そのどちらかでなければならない。そして、私にとっては、自分以上に大切な者はいないのだ。」(OC III-284～285) こうした考え方は「公共の至福が各人の幸福の上に築かれるどころか、公共の至福こそ各人の幸福の源なのだ」(OC III-284)という考え方、すなわち共和主義の人間の考え方とは真っ向から対立するものです。最後に『スペクタクルに関するダラン

ベールへの手紙』から面白いエピソードを引用しましょう。モリエールの『人間嫌い』を論じている箇所で、「家に火がついているのに、ベッドから出ようとしなかったアイルランド人」の逸話が登場します。「家が燃えているぞ、と人々は男に叫んでいた。それがどうだって言うんだ、と男は答えた。おれは借家人に過ぎないからね。とうとう火は男のところまで回った。たちまち男は飛び起き、走り、叫び、大騒ぎする。自分の住んでいる家が自分のものでなくとも、時にはそれに関心を持たねばならないということをややくのことで男は理解し始める。」(OC IV-38～39) ブルジョワのこれ以上見事な戯画化があるでしょうか。私的な事柄 *affaires privées* しか心にかけておらず、公共の事柄 *affaires publiques* (レス・プブリカ) には無関心。これでは共和国は成り立ちません。

「国家設立の目的は共通善である」とルソーは述べています(『社会契約論』第2編第1章、OC III-368)。人間がわざわざ国家という制度を作るのは、共通善の実現のためにほかならない、ということです。そうであるとするなら、〈ブルジョワから市民(公民) シトワイヤンへ〉が、ルソーにおけるレジティムな(正当な)政治社会の設立が目指すものの人間における表現ということになるでしょう。シトワイヤンこそ、公共の事柄(レス・プブリカ)を最優先に考える人間だからです。ここにこそ共和主義的人間像の核心、その本質があります。

こうした共和主義的人間像と、『夢想』で描かれる孤独な散歩者の形象は、一目見て、あまりにも落差が大きすぎます。晩年のルソーは共和主義の理想を忘れ去ったのでしょうか。

しかし先を急ぐ前に、ちょっと注意してみましょう。興味深いことに、ルソーはその政治哲学における「共通善 *le bien commun*」や「公共善 *le bien public*」と同義の概念である「公共の至福 *la félicité publique*」(誰もが幸福を享受すること)に、『夢想』において少なくとも二度言及してい

るのです。「第6の散歩」で、もしもギュゲスの指輪⁶⁾が手に入ったら自分はいったい何を望んだであろうか、とルソーは自問します。引用します、「ただひとつ、それはすべての人の心が満足するのを見たいということだったはずだ。公共の至福の光景だけが、永続的な感情で私の心を動かすことができたであろうし、それに協力したいと熱烈に願う気持ちが私の最も変わらぬ情熱となったことだろう。」(OC I-1058) もうひとつ、今度は「第7の散歩」から引用します、「人々が私の兄弟であった間は、現世の至福を求める計画を私もいろいろ立てたものだった。こうした計画は常に全体と関係するので、私には公共の至福による以外に幸福になることはできなかつたし、個人の幸福の観念が私の心を動かしたことは、私の兄弟たちが私の悲惨さのなかにしか自分たちの幸福を探し求めているのを知るまで、一度としてなかつたのだ。」(OC I-1066) 共和主義的価値観に執着するルソーが、このふたつの引用箇所には見事に見られるのではないのでしょうか。ここに述べられた思想——各人は公共の至福のなかにこそ各人の幸福を求めるべきだ——という思想は、共和主義の精神そのものと言ってよいのです。まさしくここで、ルソーは自ら共和主義の精神において生きて来たことを振り返っているわけです。ですから晩年のルソーが共和主義と縁を切ったとするのはまったく正しくないのです。事実『夢想』の先ほど引用した、「第9の散歩」に描かれた子供たちとのふたつの出会いの場面は、『スペクタクルに関するダランベールへの手紙』で描かれるあの名高い共和主義的祝祭への郷愁に彩られてはいないのでしょうか(OC IV-123～124)。ルソーは同じ「第9の散歩」でジュネーヴの祝祭も喚起しています(OC I-1093～1094)。民衆のお祭りがあると、人々の浮き浮きした顔を見るのが楽しみでいつもそれを見に行きたくてたまらなくなっ

6) プラトンの『国家篇』に登場する羊飼いのギュゲスの指輪。指にはめて回すと姿が見えなくなるという。

たが、フランスではそうした期待はしばしば裏切られたとルソーは言います。ところが、引用します、「スイスとジュネーヴでは……祭りの際に満足感と陽気な気分がいたるところにみなぎり……しばしば、無邪気な喜びに夢中になって、知らない者同士が寄り添って話を交わし、抱き合い、誘いあってその日の楽しみを楽しみあったりする。」この『夢想』「第9の散歩」に見られるジュネーヴの祭の記述は（1777年末に執筆）、20年の歳月を隔てて、『スペクタクルに関するダランベールへの手紙』のなかでなされていた、1720年代初期のジュネーヴにおけるサン＝ジェルヴェ地区での祝祭の記述（1757～58年冬に執筆）と、見事に照応し、響き合っていないでしょうか。

なるほど、最晩年のルソーは世間の目を避けてパリ郊外をひとりで散策して夢に耽る生き方を選びました。しかしそうしたルソーの夢想のいくつかに共和主義的祝祭への郷愁が明らかに感じられるのは、政治哲学者ルソーの長年に亘る知的探究を思い起こす時、読者を感動させずにはおかないでしょう。ルソーはけっしてジュネーヴ市民であることを忘れたわけではありませんでした。その証拠に、1776年12月12日——ルソーが『夢想』を執筆していた期間に当たります——パリに生きる異邦人ルソーは同国人の友人たちと一緒にエスカラードの祝祭日⁷⁾を祝っていたのです（1776年12月26日付ヴォルテールの手紙。CC-7115⁸⁾）。孤独な散歩者となっても、ジュネーヴと共和主義への愛着を捨てることはなかったのです。

結論に移りましょう。ルソーは本来孤独を愛する人ではなかったと思

7) 1602年12月12日に、ジュネーヴ市民がサヴォワ公国軍の夜襲を撃退した記念日。

8) リー編纂『ルソー往復書簡集』*Correspondance complète* de J.-J. Rousseau, R. A. Leigh éd., Genève, Institut et musée Voltaire puis Voltaire Foundation, 52 vol., 1956-1998. 書簡番号 7115、第40巻 117頁。

ます。ルソーにとって孤独とは、強いられた孤独であり、止むを得ず選んだ窮余の策に他なりません。死によって中断された『夢想』はルソーが辿りついた最後の境地を示す作品ですが、そこに描かれた「孤独な散歩者」の心のなかにも、他者との共生を重んずる共和主義的人間がしっかり生きていたのは間違いありません。ルソーの孤独 (vivre seul) は常に共生 (vivre ensemble) への希求と隣り合わせになっているのです。ご清聴ありがとうございました。

付記：本稿は『世界文学』No.125 (2017, 7) に掲載した論文「ルソーは本当に孤独を愛したのか？」に加筆・修正を施したものである。